

## 海外レポート

## 海外だよりーカリフォルニア滞在記ー

うえはらこどもクリニック

上原 真理子

あれから約1年。遠い記憶となりつつあるカリフォルニア滞在記を書いてみよう。

2018年3月で県の公務員を定年退職することになっていた私は、名古屋に住む三女から、2月になって、カリフォルニア留学に帯同して欲しいという連絡をもらう。4月からのカリフォルニア行きには同行せず、5～6月に来てねと言われていたので、若干のんびりしていた。それで慌ててパスポート申請その他をクリアし、3月30日の退職辞令を受け、4月1日にはサンノゼ空港へ向け機上の人となっていた。



スタンフォード大学構内には桜が咲いていました

娘は名古屋大学大学院で博士号取得（稲の研究）し、2017年6月に出産してポストク1年間を過ごしたため、留学時には10か月児を伴っていた。娘婿も同じく留学（蛍光生物の研究）なので、親子3名にベビーシッターが同行する、の図である。

9時間ほどで、明るく晴れ渡ったカリフォルニアに降り立った。すぐに予約してあった大型レンタカーに乗り込み、宿泊コテージへ向かった。翌日には約100キロメートル北にあるサンタクルーズに2

週間滞在するべく車で移動。この期間に、住居と保育園を決め、乗用車1台の購入をする必要がある。車の右側通行、6車線のハイウェイ、ナビの指示通りに運転して無事たどり着いた。ここには娘婿が3か月滞在していたことから、大家さんの好意で一軒家を安く貸していただいた。しかし、ワンルームの一軒家の為、私は一人、そこから歩いて15分程の民家の離れをホームステイ先として借りることになった。カリフォルニアらしく庭の手入れが行き届き、どの家庭にも美しい花が咲き乱れていた。

朝は8時15分頃娘たちの家へ出かけ、娘夫婦が住居や保育園探しをする間の孫の保育とご飯の支度が私の役目だった。大家さんともう一組のカップルとで台所は共有、トイレ・シャワーも一つのため、初めての共同生活を体験した。私自身、大学は地元だったし、そのまま結婚したので、家族か夫以外との共同生活はなかったのだ。そのため、朝食や昼食をかち合わないよう気配りし、夕食は大抵、この一組のカップルと一緒に食べた。彼らと娘婿が友人なのでお互いの持参したものや買って来たものを出し合い、どちらかが主導して作って食べる毎日。古いカントリー調の家は、さながら「私のお部屋」という雑誌から抜け出たような造りで、鍋も食器もキッチンにあるものは何でも使ってよいという大家さんの配慮があり、色々な材料で食べた。また、木の皿や木のボウルの使い勝手よさには感動した。残った料理は必ず保存容器に移して共用の冷蔵庫に入れる約束。重ねて入るし、回転よく使い切る。皆で食べてよいものには印を付けておく等、大家さんのポリシーが娘婿やカップルから伝えられた。

さて、期限の2週間ギリギリで転居したのが、

最初に降り立って宿泊した地域であるマウンテンビュー市であった。家具付きなので引っ越し感覚ではなく、旅行のスケジュールで動いた感じだった。住居探しをしてみると、グーグルやアマゾンの本社があるということから地価が上昇しているらしく、広いが普通のアパートメントなのに、月25万円という驚きの賃貸料であった。

保育所は、行く前から娘が4か所リストアップしてあったので、実際に行ってみて決めた。公的施設ではなくて、直接契約である。保育士はきちんとした資格の掲載された証書を示して、保育内容や周囲の環境等々を1時間半ほどかけて説明してくれた。自宅と職場との位置関係も大きな要因だったが、周囲の環境も気になるので、その決定は結構難しかった。保育料が月20万円というこれも驚きの値段！

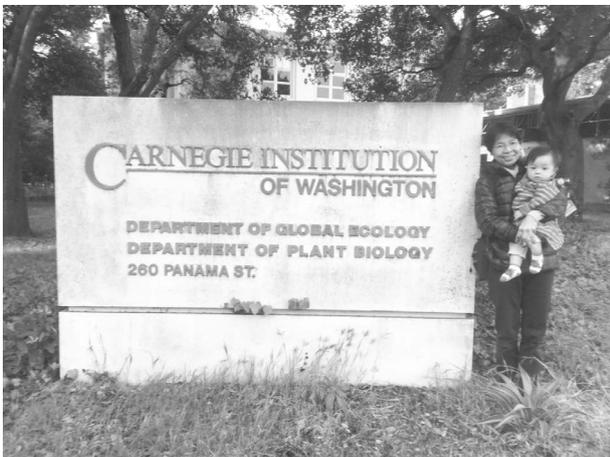
また、乗用車が来るまでは先のレンタカーの延長申請で過ごしたものの、それも切れて車が我々のところに来るまで、娘は自転車で勤務先へ通うことになった。スタンフォード大学内にあるカーネギー研究所が職場だが、そこと自宅アパートの中間地点にある保育所へ、自転車に専用のトレーラーを装着して、孫にはヘルメット装着という方法だった。こんな大きな道路に自転車なんて、朝送り出して帰宅するまで不安で生きた心地もしなかった。スタンフォード大学の敷地は町一つ分かと思うほど広く、娘が初めて一人で出勤した日は、大学の敷地内で迷って遅刻しそうになったそうだ。車は購入しても、ある期限内にカリフォルニア州の運転免許を取得す

る必要があった。申し込んですぐ受験できる訳でもなく、直接行って6時間並んでも受験できなかった。あとで聞くと、何か月後に受験してやっと取得したそうだ。車の車種はトヨタが多く、次いでホンダ、そしてスバルが多く走っていた。名古屋市出身の婿さんがトヨタの中古プリウスを購入した皮肉な話と、お安くなかったことに驚いた。帰国するまで綺麗に乗って、しっかり売らねばと決心したことであった。

車といえば、深海への航海に出かけた婿さんを迎えに娘の運転でサンタクルーズまで出かけた時のエピソード。年に何度も婿さんは航海に出て深海の光る生物の探索をするので、私が滞在した期間中にも1週間出かけた。初めての異国にベビーと母親だけの生活は想像に難くない。熱が出たら、思わぬハプニングがあったら、と考えるだけで不憫な思いになる。婿さんが航海から戻る日には、夜のハイウェイ6車線を慣れない右側通行でナビが「キープレフト」という指示に従うも、追い越し車線に初心者運転の車がずっと居座る状態。当然、「どけ、どけ！」の意思を示す大きな「パッパァー！！」クラクションの連続である。運転している娘は最愛の息子と実母を乗せ、自分と3名分の命を預かる羽目に陥り、半ばパニック状態。婿さんを迎える場所に到着した時はかなりの虚脱状態だった。

かかりつけ医を決めることについて、小児科は孫のため必須だったので、それぞれの職場で情報を得て決めた。成人は内科、外科、耳鼻科、眼科、歯科等々の該当する科毎に決めるそうで各自の保険によって選ぶとのこと。

2週間滞在したサンタクルーズでの朝の散歩（娘家族のもとへ通う道）では、毎朝知らない人が「(グッド)モウニン！」と声をかけてくれる。老若男女そうだった。しかし、マウンテンビューに来てみると、誰も顔を合わせず、目も見ない。挨拶する雰囲気もない。さすが都市部だなと感じた。熊本でも那覇でも感じていたことが、国は違っても同じと妙に納得した。特に宮古島に通算5年の単身赴任をした私は、宮古から那覇に戻った時に何度も似た経験をしていた。



カーネギー研究所前で孫と一緒に



ダウンタウンにあるお店のアメリカンフード

荷物の届き方には随分驚いた。インターネット注文の品は住宅のドア前にポンと置いておくのみ。私は在宅していたのに、えっと思ったことが何度もある。日本からの小包は、担当者がきちんと手渡しで届けてくれたので安心したが、娘たちが日本から出発前に送った貴重な本の数々はとうとう届かず終いとなったのは残念だった。

アパートメントに入居してすぐ、食洗機から水が溢れて台所が水浸しとなったので修理に来てもらうことになった。また、火災報知器の点検もあった。異国の地にわずか10か月のベビーと私の2人きりの所へ、いかつい男性がやってきてせっかく拭き上げたフローリングの上を土足でツカツカと踏み込み、聞き取れない英語で質問された。よくわからないでいると、わかる人の電話番号を言いなさいというので、娘にライン電話を入れて番号を復唱する。火災報知器点検の折は、そういう人が来るとは知らされておらず、ピンポンが何度も鳴るので仕方なくドアを開けた。よくわからないのに開けていいのか、強盗ではないだろうか、孫を守れるだろうかと決死の覚悟だった。強盗だったらと思うとドラマのように思えた。こんな異国の地で孫とともに銃殺されてしまうのか等々、頭を駆け巡った。

異国の地で異邦人として暮らすことがいかに大変なことか。きちんと外国人登録されていなければ何もできない。私自身は沖縄で異国の方々が普通に暮らしているを見てきたが、自分の国に生まれた時から暮らしているという幸せの自覚はなかった。日本という単一国家に生まれ暮らしていたのが、アメリカという多民族国家での多種多様な人種との暮らしを肌で知ることになった。

高校卒業までが沖縄で、名古屋大学入学以降、大学院、結婚、出産まで別に暮らした娘とその家族との同居も初めての経験だった。出産後1週間で産後の手伝いに行った時で1週間の滞在。今回は彼らが異国で生活基盤を立ち上げ、研究者としてのスタートを切ることを目指した1か月半。ともに共通のミッションを完遂する同志のように暮らせたことが一番大きな収穫だった。新しい任地が気に入って、2年と言わずもっと居たいという娘夫婦を見ていると、遅くしなやかな若い世代を感じた。実験が思うようにいかない時や、孫のお迎えがあるため思いつき研究できない娘に、同い年の婿さんが分野は違っても、じっくり話を聞いてサジェスチョンをし、家事・育児をする（実際、しっかりできる！）のだ。共通の友人ではなく、娘の友人が近くで勤務することになり我がアパートメントを訪ねてくれた時も、孫のおむつ交換や孫が眠りに就くための導入を婿さんが何気なくやっていた。普通に力むことなく家事も育児もやる婿さんを、今回改めて見直した。一人の男性として、いや人間として、しなやかで余裕のある心持ちの人であることがよくわかった。同じ研究者として、お互いがお互いを尊敬しているからこそ、しっかりと向き合い議論するし、相手の時間確保にも貢献する。娘がこの人と結婚することを決意した理由がよく理解できた。

最後にカリフォルニアという土地は総じて素敵な地域であり、異国で娘家族との面白い同居生活ができたこと、日本の良さをひしひしと感じたことは大きな成果であった。退職してすぐの自分がどこにも所属していない半端な立場で、自分とは何ぞやという迷いをどう埋めるか考えながら帰途についたのだった。